

|           |                                   |
|-----------|-----------------------------------|
| 氏 名       | なが お しん いち<br>長 尾 伸 一             |
| 学位(専攻分野)  | 博 士 (経 済 学)                       |
| 学 位 記 番 号 | 論 経 博 第 273 号                     |
| 学位授与の日付   | 平 成 14 年 1 月 23 日                 |
| 学位授与の要件   | 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当           |
| 学位論文題目    | ニュートン主義とスコットランド啓蒙<br>——不完全な機械の喩—— |

|        |                      |               |             |
|--------|----------------------|---------------|-------------|
| 論文調査委員 | (主 査)<br>教 授 田 中 秀 夫 | 教 授 八 木 紀 一 郎 | 教 授 根 井 雅 弘 |
|--------|----------------------|---------------|-------------|

### 論 文 内 容 の 要 旨

「ニュートン主義とスコットランド啓蒙」と題する本論文は、ニュートンという知的巨人の影響が啓蒙の社会科学形成にどのような影響を与えたかという問題に関して、スコットランド啓蒙に即して解明しようと試みた意欲あふれる試みである。

しかし、著者は謙虚にも本論文の範囲を限定して、スコットランドにおけるニュートン主義の歴史の叙述を意図するものではなく、「18世紀スコットランドで、社会についての学問的知と自然認識がどうかかわっていたかを、ニュートン主義のある特定の形態のみに絞って考察し、この小さな窓を通して、18世紀ヨーロッパ思想の一つのパースペクティブを与えることを目指している」と言明している。しかし、実際には、小さな窓から大きな世界へと議論は限りなく飛翔していくといった論文である。

本書は、第1章「ニュートン主義の定義・方法・機関」に始まり、第2章「根源への終わりなき階梯」、第3章「無限性の迷宮」と続き、2・3章で第1部「スコットランドのニュートン主義」を構成する。

したがって、第1章は全体の序章という意味あいをもっている。実際に第1章の議論は本書全体の序説であるとともに総括ともなっていて、17世紀から18世紀にかけての主としてイギリス（イングランドとスコットランド）の知の社会史としての自然科学史の概要、変容を描いている。エディンバラ哲学協会と選良協会とニュートン協会の談話構造分析がここに登場し、この面でも本書の序章としての役割が示されている。

第2章はニュートン主義の線形性を問題にするとともに、ダンカン・フォーブズやメルヴィルを通して、世紀前半のニュートン主義（初期ニュートン主義）が部分的な不可知論、複雑性としての宇宙観という特徴をもち、信仰と科学を調停するキリスト教科学者に担われていたという主張が提出される。

第3章は、ニュートンの原理はオカルト的であるとして批判的であったパークリの『解析者』と、パークリに批判的であった数学者として著名なマクローリンの『流率論』を分析して、マクローリンが典型的なキリスト教科学者としてニュートン体系を弁神論として受容したこと、科学と神学を統合するフォーマットを提出した典型的な初期ニュートン主義者であったという解釈を提示する。

第4章「動力のない機械」、第5章「北東のラピュータ」、第6章「壊れやすい機械」の3章が、第2部「道徳哲学とニュートン主義」を構成する。つまりニュートン主義の道徳哲学への影響が正面から問題にされるのがここである。

まず第4章ではアバディーンの道徳哲学者ターンプルが主人公である。ヒュームは自然神学と自然哲学を分断したが、それを関連づけるばかりか、ニュートン主義のプロジェクトを道徳哲学にまで適用した先駆者がターンプルであった。けれどもターンプルの道徳哲学は人間の心理や社会の仕組みの議論に留まり、ヒュームやスミスのような個人の欲望から社会が構成されることを想定する倫理学には到達できなかったことを著者は力説する。

第5章が扱うのはアバディーン啓蒙の談話構造と実験哲学の論理的構造分析である。知的サークルでの討論のテーマを分類してダイアグラムを形成し、特徴を探るということが行われ、それが大学でのカリキュラム改革と関連づけられる。ここでもヒュームとの対決が強調されている。

第6章は、ニュートン主義の政治経済学としてリードの講義ノートが分析される。著者が実験哲学の経済学としてリードのそれを再構成し、それがスチュアートの原理と親近的な蓋然主義的政治経済学とでも呼ぶべきものであることが主張される。すなわち完全な時計ではなく、不完全な時計という世界理解にそれが関わっているというのである。

最後に、第7章「永久機関と力」、第8章「道徳哲学のニュートン」、第9章「帝国、産業、そして実験」という3章が、最終第3部「盛期啓蒙と実験哲学」を構成する。

第7章はケイムズの運動論から新しい物質観、すなわちブラックの哲学的化学、ハットンの地質学などを論じて、永久機関としての自然観の成立を説き、このような新しい見解に対して初期ニュートン主義は対応を迫られ、それがリードのキリスト教社会主義のユートピア、蓋然性の改革論の成立につながると論じる。

第8章はアダム・スミスの方法論である。すなわちスミスは他ならざいゆるニュートン主義者として登場する。しかし、スミスのニュートン主義は必ずしもニュートンの方法の正しい理解ではなかったと著者は強調する。スミスのいうニュートンの方法は、正確には公理—演繹という幾何学の方法であって、実験哲学の方法ではなかった。スミスのこの知的混乱の起源をたずねて、著者はグラスゴー大学時代、オックスフォード大学時代のスミスの論理学や自然科学の知識を回顧し、混乱の源泉を探っている。

第9章は哲学的政治学の退場と実証主義の時代への転換が論じられる。思索協会の談話構造を分析して、論題にはあいかわらず理神論などの古いものが取上げられもするし、哲学的政治学の論題も残存しているが、他方で帝国に関わる論題が多数登場するという転換も指摘され、明らかに大きな変化が起こったこと、しかしその変化は漸次的であったことが指摘されている。さらに19世紀の経済学、社会科学について、方法論を中心とする展開が展望されている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文はスコットランド啓蒙におけるニュートン主義の影響を解明するという、従来、決して十分には遂行されてはいないテーマに取り組んで、意欲的に研究を行い、その成果を絢爛たる表現に盛り込んだ力作である。

スコットランド啓蒙におけるニュートン主義を問題にするにあたって、著者がまず行わなければならなかったことは、ニュートン主義の概念の分類整理であり、そのためにニュートン以後のニュートンにまつわる思想の流れを明確に把握することであった。こうしていわゆる完全な機械論的モデルとしてイメージされているいわゆる「ニュートン主義」と、スコットランドに導入された、不完全な機械として世界をイメージする「初期ニュートン主義」という区別を著者は導入し、そうすることによって、自然観のみならず、社会観も二つのタイプに区別できるというアイデアにたどり着いた。

その結果、本論文の中心をなすアバドニアン（アバディーンの啓蒙知識人）を中心とする多くの思想家たちが、初期ニュートン主義に分類される自然観と社会観を持っていたという見解を著者にもたらしことになった。この見解はさらに裏付けを必要とするものであるが、スコットランド啓蒙に対しても、さらには19世紀大ブリテン啓蒙に対しても、一つの有力な解釈としてその可能性が試されてよいものである。本論文の最大の意義はここにある。

第二に、スコットランド啓蒙におけるニュートン主義は、これまで十分に究明されてこなかったために、著者は概念を研ぎ澄ます一方で、当然のようにスコットランド啓蒙の特に自然哲学関連文献を博捜しなければならなかった。その結果、著者がわが国では初めて紹介される多数の文献、草稿に光をあてたことを指摘しなければならない。草稿のなかには外国の研究者も含めて著者が初めて光をあてたものも存在するように思われる。

第三に、本書の中心をなすのは、コモンセンス学派のトマス・リードであるが、リードの草稿に分け入って政治経済学の輪郭を明らかにしたことも、リード研究として貴重な貢献である。ここでのキーワードは蓋然性、蓋然主義であって、それはスチュアートの経済学の特徴でもあるとされ、スミスの幾何学モデルと対比される。

さらにいくつもの知的サークルの談話構造の分析は、表面的な比較を越えるものではないけれども、全体を眺望させてくれる有益な試みであって、本書を理解しやすくしている。その他著者の研究成果は多数に及ぶが、その圧倒的な表現力によってアピールするものとなっている点も指摘しておかなければならない。

しかしながら、本書の問題点は、まさにこのような意欲的な試みであることに絡んで存在している。例えば、著者は古典派経済学と18世紀のニュートン主義、機械論的世界観、デカルト的分析の方法を結びつける常識的な通説を退ける。それは

よいとして、返す刀で、真の自由主義と有機的秩序、理性の不完全性＝経験主義を結びつけるものとしてハイエクの自生的秩序論をまとめ、それをスミスに読む試みも切り捨てる。自生的秩序の思想は、初期ニュートン主義が蓋然主義的な政治経済学の建設によって発見したのだというのである。しかし、この解釈は無理である。自生的秩序の思想は、ニュートン主義起源であるというようなことは、証明できないであろう。マシュー・ヘイルやクックはどうして初期ニュートン主義者でありえただろうか。

あるいはまた著者によれば、18世紀中葉の政治社会像をめぐる分極は、理性による社会の設計主義的構築論と自然発生的な社会秩序構築論にあったのではなく、社会という精密な時計は壊れないか、壊れやすいかにあったのだという。この大胆な発言を裏付けるべく著者は17世紀末ブリテン思想に遡っているが、その論拠は十分ではない。実はこの思いつきが本書の背骨をなしていると言ってもよい。そしてライブニッツークラーク論争にそのような宇宙観の相違があることは、つとに知られていることである（著者は挙げていないが、例えば村上陽一郎によって）。そうすると一見複雑を極める本論文の構想の本筋が見えてくる。この着想を本書は相当努力して論証しているが、果たして十分であろうか。著者もそのような不十分さは自覚しており、問題提起に本論文の意義を求めている。

しかし本論文の最大の問題点は、そうした構想にあるよりも、本論文で中心をなすはずの道徳哲学や社会思想の分析が弱いことである。ターンプルの『道徳哲学の原理』は少し取上げられているに過ぎないし、リードの三部作はほとんど問題になっていない。ニュートン主義を自然哲学だけで問題にしたのではスコットランド啓蒙との関係の解明にはならないであろう。スミスについても方法論で問題になっているに過ぎない。なるほど、その代わりに著者は現地に再三足を運んで容易に読めない草稿の解説に力を注いでいる。また知的サークルの議事録を取上げ談話構造の分析でその欠を補っている。しかし、主著に取り組まずに草稿や論題だけの議事録に力を注ぐというのは、正攻法ではないであろう。

そして、そもそもニュートン主義から見えるスコットランド啓蒙の世界は一見広いようで狭いことが指摘されなければならない。著者はスコットランド啓蒙の成果をどう考えているのであろうか。文明社会史はこれではつかめないし、道徳哲学も経済学も法学もその内実においてニュートン主義を問うことで、どこまで把握できると著者が理解しているのか、定かでないのである。

このような問題点があるとはいえ、本書は意欲溢れる斬新な、問題提起的な、優れた研究であることは否定すべくもない。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成13年11月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。